HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	川端康成の研究 ： モダニズムの方法をめぐって［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	常, 思佳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13404号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74485
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Sijia_Chang_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　常　思佳

学位論文題名
川端康成の研究――モダニズムの方法をめぐって

・本論文の観点と方法

本論文は、三部立てで構成されている。戦前から戦中・戦後にかけての川端の作品を通史的に追いながら、初期の川端のモダニズム文芸の方法論が、その後いかに継承されつつ変容していったのかを作品の細部の表現技法に着目しながら具体的な相において明らかにすることを目的にしている。

第一部では、「伊豆の踊子」・「ある詩風と画風」・『浅草紅団』といった一九二〇年代の短篇・長篇小説を取り上げ、それらの小説に共通する主人公「私」の錯綜した「意識の流れ」に注目する。さらに、「ある詩風と画風」の小説家「私」による「詩的精神」をめぐる思考、『浅草紅団』の小説家「私」が創作する劇的な筋を分析し、作中の小説家「私」を通して、小説を創作するさまざまな方法を明らかにした。

第二部では、一九三〇年代の作品を取り上げて、小説の言語表現と視覚メディア（絵画・写真・映画）との相互関係に注目し、その諸相を考察した。〈浅草もの〉から〈実録もの〉への移行、そして『雪国』への連続性に目を向けながら、それらの作品に共通する表現の特質を分析した。具体的には、「落葉」における日本画、「散りぬるを」における写真、『雪国』における映画的な表現の分析に特化しながら、「新感覚派」的方法論の実践を跡づけた。

第三部では、戦後の作品、特に一九五〇年以後に書かれた「古典回帰」と評価される長篇小説『千羽鶴』とその続編『波千鳥』、『古都』を取り上げて、戦前の小説に遡ることのできる「新感覚派」的な言語表現法や、「詩的精神」をめぐる問題系と交錯させながら、戦前・戦中の川端作品との連続性と非連続性を確認しつつ、戦後の作品の内実を明らかにした。具体的には、西洋の複製芸術（写真と映画）と異なる日本の古美術（陶芸・和歌・着物）を手がかりに、戦後のファミリー・ロマンスを主題とする長編小説のなかで、女性をめぐる結婚関係、および新しい共同体の形成のあり方を考察した。

・本論文の内容

序章において、川端康成の随筆から窺えるモダニズムの方法論を整理したうえで、川端文学の戦前・戦中・戦後の連続性と非連続性とを考察するという本論文の目的と方法論が提示された。

第一章「伊豆の踊子」論において、旅先・伊豆の風景をめぐる記述を挟みながら、二十歳の「私」の思い出がいかに重層的に回想されているのかを細部のレトリック分析を通して明らかにした。人間の心象が、〈水〉や〈雨〉などの自然現象として現れる、いわば「寄物陳思」の古典的な主題をめぐって、ドイツ表現主義やフランスの戦前派映画の手法を参照しながら、言語の表音性（オノマトペ）を抽出し、視覚性（心象）との関係を明らかにすることで、本作のアヴァンギャルト性を再評価した。

第二章「ある詩風と画風」論では、ある同一の対象（＝狂気の女）をめぐる、画家と詩人との認識の違いや創作論と照らし合わせながら、近代小説に内在する「ポエジー」について、小説家「私」が、どのように捉えているのかを明らかにした。「私」の小説論は、立体派的な画風を導入した近代小説に見られるような、新興の「詩的精神」と関わり、芥川龍之介と谷崎潤一郎との「話らしい話のない小説」論争から生まれた「詩的精神」まで遡って考察した。また、同時代の詩誌『詩と詩論』誌上に見られる春山行夫の「日本近代象徴主義詩の終焉」などとの言説と交錯するテクストであると位置づけた。

第三章『浅草紅団』論では、小説の「詩的精神」と対立する演劇性をめぐって、フランスの詩人ジャン・コクトーが提出した「舞台の詩」に着目し、「浅草」を舞台とする超現実的な空間のなかで、演劇の台本を書く小説家「私」が道化役を演じることを通して、劇的な「ポエジー」から小説の筋を生成するプロセスを考察した。フランスの〈エスプリ・ヌーヴォー〉は、プロレタリア文学と対抗する「新興芸術派」の陣営に属する川端の理論的支柱となり、小説の創作において、それを積極的に実践していたと結論づけた。

第四章「落葉」論においては、ヒロインが日本の新舞踊運動を先導した舞踊家・藤間静枝がモデルであることを踏まえたうえで、「彼女」の形象には、菱田春草の絵画「落葉」と「新日本音楽」を創造した宮城道雄の音楽「落葉の踊」が借用されていることを明らかにした。小説「落葉」は、絵画の「落葉」を「彼女」の心象として可視化し、音楽の「落葉」とあわせて、西洋舞踊に由来するロンド詩型として構成されており、そうした点から本作を新心理主義小説と位置づけた。

第五章「散りぬるを」論では、女性の死体写真に触発された小説家「私」の想像力によって、訴訟記録に記された「現実」とは異なる殺人事件の真相が、精神変質者とされた殺人犯と「私」が（非）同一化することによって、理性的に再構築されていることを明らかにした。写真の物質性と小説言語の虚構性との齟齬に注目した小説家「私」は、仏法の歌を再解釈し、書くことについての倫理の更新を目指したと結論づけた。

第六章『雪国』論は、映画の運動性と小説言語との相同性に注目する。島村の移動中の汽車の窓ガラスを映画館の比喩表現として捉えながら、窓ガラス越しの風景は島村の内面に流動している心象として可視化されていると述べる。そこからさらに、フランス文人達の舞踊論を翻訳した島村は、結核で死に行く行男のために苦労する駒子の物語を通して、島村の「従労」への肯定と自己浄化を導いたのだと結論づけた。

第七章『千羽鶴』論は、戦前の「新感覚派」的な言語表現と接続される〈茶碗〉の触覚性と物質性をめぐって論が展開される。現代のテクノロジーである電話線とともに、それが縁談・結婚・破倫の複雑な人間関係を結ぶ象徴であることを検証した。敗戦の廃墟から社会の秩序を取り戻して、戦争を生き延びた主体の描き方を検討しながら、本作は、戦後日本の家族と共同体を描いたものであると評価した。

第八章『波千鳥』論においては、万葉集の相聞歌を引用した手紙に注目し、書き手と読み手の心象風景の重なりから、戦前の新心理主義小説に接続できる作品として位置づけた。このような伝統的な和歌を書き換えることで、小説の読者の記憶を喚起させる効果をもたらしたと述べる。また、本編『千羽鶴』に登場した実物の古美術品と虚構の和歌は、重層的な歴史の記憶と戦後の現在を同時に浮上させながら、新たな共同体の記憶を編成するものであると分析した。

第九章『古都』論では、京都で着物を経営する老舗の二代目が、パウル・クレーの前衛絵画から、植物のメタモルフォーゼ（変態）の造形方法を取り入れて、養女との親子関係を結ぶための帯の図案を設計したものであると解釈した。伝統的な帯の横糸と縦糸を、一卵性双生児の染色体と類似する構造と見なして、前近代的な養子縁組のような家族関係を解体させ、アヴァンギャルド的な着想に基づく幻想的な婚姻・家族関係を描き出して、戦後の新しい共同体を形成する紐帯ともなっていることを論証した。

終章では、本論文各章の内容を整理し、成果と課題を提示した。